

翻
訳

Charlotte M. Brane 著 『ドラ・ソーン(Dora Thorne)』(翻訳・その21)

堀 啓子

これまで『東海大学紀要 文学部』に連載してきた本稿は、『東海大学紀要 文化社会学部』に稿を移し、引き続き、『ドラ・ソーン(Dora Thorne)』の翻訳を掲げる。原著は長編物語であるため、分載二十一回目となるこのたびは、第二十六章の訳を掲げることにする。猶、原著も引き続き Dodo Press の二〇一〇年リプリント版に拠るものとした。

*本稿は、科学研究費補助金【基盤研究(C)】「課題番号：21K00290」による研究成果の一部である。

二十六章

レディー・アールにはその日、息子がかつてないほど沈んで悲しそうに見えた。彼女は知らなかった。彼が、どれほど自分の後継者となるあのハンサムで雄々しい若者の面影を忘れ得ず、どれほど自分には後継者となるべき息子がいないことを悔いているか。そして

彼が、ライオネルのような息子がいたらどれほど誇らしいと思っていたはずか、母にはわからなかった。彼にはただ二人の子供しかおらず、その子供たちもいつの日かアールズコートを離れて自分の婚家へと去ってしまうのだ。この大きな壮麗な館と美しい領地は、彼の最愛の美しい娘たちのうちのどちらか一人がライオネルと結婚しない限り、あかの他人の手に渡ってしまうのだ。

その日、息子がライオネルに出会い、彼を招いて食事を共にすることになったと聞いた時も、息子が何を思っていたのか、彼女はほとんど気づかなかった。

「私はずっと、ベアトリスが彼を気に入ってくれたらと望んでいました。」とレディー・アールは言った。「でも、もうそれはありませんね——エアリー卿が早すぎましたもの。ライオネルがああ娘と恋に落ちることはないでしょう。残念なことですね。」

「彼はリリアンを好きになるかもしれません。」とアール卿は言っ

た。

「そうですね。」とレディー・ヘレナは同意した。「愛らしいリリ——あの子は、この濁った地上にはあまりにも純粋で汚れがなさすぎるように思えるのですよ。」

「娘たちがともに結婚してしまえば、母上」とロナルドは悲しげに言った。「我々はずいぶん寂しくなりますね。」

「そうですね。」と母は応じた。「ずいぶん寂しくね。」そしてその悲しい言葉は彼女を打ちのめした。彼女は、悲しげに弱々しい表情を浮かべた息子の端整な顔を眺めた。息子にとって人生は、そして彼の時代も、本当に終わってしまったのだろうか。他の人々が幸福な人生を歩み、愛する妻が家を華やかにして夫を楽しませ、慰め、悲しみを分かち合い、愛情で夫の人生を輝かせているのに？財と富は充分にありながら、息子はなんと孤独なことか！たった一度の反抗が、こんなにも悲しい結果をもたらすなどありえたのだろうか？ああ、何年も前、ロナルドが道理に従い、賢明で優しい助言に耳を傾けて——ただ、ドラのことを諦めてヴァレンタイン・カーテリスと結婚してさえいれば、その人生はどんなにか違ったものになり、どんなにか祝福と幸福に満ちて、どんなにか心配ごとなどは無縁の生活を送っていただろうに！

こんな思いが胸をよぎるとアール卿夫人の目は涙に曇った。彼女は息子のそばに行き、肩に手をおいた。

「ロナルド」と彼女は言った。「私たちの陽気な小鳥たちが巣立つた後でも、この家をできるだけ幸せにするように私がベストを尽くしましょう。あなたにとって、この状況が違ったものであったならばと思います。」

「ああ、母上。」と彼は優しく答えた。「何を言っても始まりません。自分で蒔いた種を私は刈り取らねばなりません。反抗と欺瞞は決して幸せをもたらさないので。悪行は必ず報いをもたらすと私はずっと思っています。私を憐れまなでください——氣力が失われます。私は運命に耐えねばなりません。」

レディー・ヘレナは、ライオネルとの再会を喜んだ。彼女はずっと彼に好感を持っており、今や彼が輝くような大人に成長したことを嬉しく思っていた。二人の姉妹の前に立った彼は、二人の美しさには半ば目がくらんでいた。美しい二人の顔が彼に微笑みかけ、握手のために二人の白い手が差し伸べられた。

「自分の幸運に戸惑っています。」と彼は言った。「ロンドン中の男性たちから羨ましがられるでしょう。人はもう私をライオネル・ダッカーとは呼ばないでしょう。「あのアール家の令嬢たち」の従兄弟として知られるでしょうね。私には兄妹も姉妹もありません。こんなご家族の一員となれる幸せを夢見ていたのです。」

「そしてその場があなたを歓迎するのです！」と、ベアトリスが

割って入った。ライオネルは深々と頭を下げた。初めのうち、彼はこの輝くような美貌の娘のほうが、きれいで優しい妹よりも好きだと思ひ込んでいた。その率直で物おじしない話しぶりは楽しかった。若い令嬢たちにこれまで一通り出会って来たが、彼女らは皆同じで、代り映えしなかった。だがベアトリスの思考はとても独創的だった。

エアリー卿がこの小さな夕食会に参加し、ライオネル・ダッカーは、ベアトリスが彼女自身にも隠していた秘密を嗅ぎ取った。

「私はあの岩で座礁したりはするまい。」と彼は自分に言い聞かせた。「ベアトリス・アールが私に話すときには、私の目を見て微笑み、恐れなど感じていない。しかしエアリー卿が話すときには、彼から視線をそらして美しい瞳は下を向いている。明らかに彼女はこの地上の何よりも彼を好きなのだ。」

しかし時が経つにつれ、美しいリリアンの、高雅な愛らしさが彼の心を捉えていった。二人の姉妹はずいぶん違っていた。ベアトリスは、言うなればあつという間に人を魅了した。圧倒的な美貌と女王のような優美さに人は目がくらみ、心が奪われるのだった。だがリリアンは違った。一見すると、より輝いている姉の隣ではその美しさはやや劣るが、清らかな美しさは、次第に人を魅了するようになるのだった。きれいな顔立ちと、思慮深げな表情、深い夢見るような瞳、波打つ金髪、落ち着いた姿のこの世の物とは思えない雰囲気などの魅力が次第に露わになるようだった。初めのうちはリリアンをきちんと見ることなく、ただ輝くような姉のことばかりを思っ

ていても、しまいはリリアンの方をより美しいと感じるようになる人が多かった。

その夜、姉妹たちはエアリー卿とライオネル・ダッカーの前に立った。そしてベアトリスが歌い、空気も静まり返って彼女の情熱的な歌声を響かせるようだった。

「あなたはセイレーンのように歌いますね」とダッカー氏は言った。彼は、この身内の女性に対して、使い古されたお世辞を言うことに躊躇はなかった。

「いいえ。」とベアトリスは答えた。「私の方が上手——実際、私はそう思っています。私の心には音楽があふれていて、唇からこぼれ出してくるのです。でも私はセイレーンではありませんよ、ミスター・ダッカー。私のような黒い髪と眉のセイレーンなんて、誰も聞いたことがないでしょう。」

「あなたは魅力的な魔法使いのように歌う、と言うべきでしたね。」と、エアリー卿はこのお世辞がふさわしいことを願いながら割り込んだ。

「あなたも間違っておいでですわ。」と彼女は応じたが、ライオネルに対するときは違い、笑いかけなかった。「もし私が魔法使いなら」と彼女は続けた。「ただ棒をふるって、あの花瓶の花を私のところに飛んで来させますわ。実際には、私が近づかねばならないので

すが。誰があの花を活けたのかしら？ここ半時間ほど、ずっとあの花に悩まされてきましたの。」彼女は部屋を横切り、小さなサイドテーブルから、あふれんばかりに花の活けられた精巧な造りの花瓶を手を取った。

「ご覧下さいいな。」と彼女はライオネルを振り向いて叫んだ。「白いヒースに白薔薇、白百合がこんな薄グレーの花とともに！こんなアレンジには何のコントラストもありませんわ。輝くようなザクロの花や真紅の美女桜が織りなす対照との違いをくらんく下さいな。」

「あなたはそうした落ち着いた色の調和がお気に召さないのですね？」と微笑みながらライオネルは言い、この小さな出来事は何と象徴的なことかと思っていた。

「ええ。」とベアトリスは答えた。「もつとはっきりとした対照を望みますわ。長い間、私の人生は灰色の織物のようで、私はわずかも織り込まれる真紅の糸にずっと憧れていたのです。」

「今は手に入れていますね。」と、ダッカー氏は静かに言った。

「ええ。」と言いながら、彼女は美しく輝く顔(注)で振り向いた。「今は手に入れ、二度と失いません。」

エアリー卿は、じっと見つめて彼女の口からこぼれ出る一言一句

に聞き入りながら、愛は彼女の人生を赤く彩って折り込まれる糸になりうるのだろうかと考えていた。そうはなるまい、と自分に言いながら彼は深いため息をついた。この美しい娘が彼を好きになることなどありえないだろう。ベアトリスはこのため息を聞いて振り向いた。

「あなたのお考えは私に似ているでしょう、エアリー卿？」

「私は」とエアリー卿は口をはさんだ——「あなたが好まれることならば何でも好みます、ミス・アール。」

「ご自身が最も好きでしようけれど。」と、ライオネルはベアトリスに囁いて微笑んだ。

その宵、歩いて帰りながら、彼はずっと熱心に彼の身内のこの二人の若い女性のことを考え続けた。あの謎は何だろう？彼は自問していた——あの明るい豪邸に隠されている骸骨とは？あのテーブルの上座にいるべきアール卿の妻——娘たちの母親はどこに？彼女はどこにいるのだ？なぜ夫の顔は陰りを帯び、不安に満ちているのだ？

「リリアン・アールは今まで出会った少女たちの中で最も美しく、愛らしい。」と彼は独りごちた。「驚くほどきれいな、誠実な眼差し

だが、もし何か問題があるのなら——彼女の母親に非難すべき点があるとすれば——こんな危険は避けねばならない。美德も悪徳も遣伝するものだ。リリアンに恋をする前に、母親の話を知る必要がある。」

彼は本気でそう考えた。だがそれを知る手立てはなかった。時に娘たちは母親の話をしたが、その口ぶりはいつも深い愛情と尊敬に満ちていた。レディー・ヘレナも彼女の話を話すことはあったが、アール卿からは一言もその名が聞かれることはなかった。ライオネル・ダッカーにはこの件を知る由もなかった。

ドラの住居はすぐわかった。ある時、彼は特権として決して他の客が通されることはない、婦人たちの、きれいな朝の居間に通された。——それは居心地のよい明るい部屋で、壁に、豊かな緑の草原の真ん中に閑静な農家の佇む美しい景色を描いた絵がかけられていた。リリアンは微笑みながら、それはナッツフオードのエルムスで「お母様のお住まい」と彼に話した。

ライオネルはあまりにも紳士だったため、彼女がなぜそこに住んで居たのかを尋ねることはできなかった。彼はその絵を賞賛し、話題を変えた。

アール卿夫人が予見したように、ドラの子供たちは、彼女らの家族には溝があり、その断絶は決して埋められるものではないということを理解するようになっていた。「お母様はお父様とずいぶん違っ

ていらつしやるわね。」と、二人は互いに話した。レディー・ヘレナは彼女らの母親が素朴に育てられ、静かさと孤独に慣れていたために流行や華やかなことが好きではなく、そのためにどんなことになってもアールズコートに来ることは決してないと話していた。

それでも時が経つにつれ、ベアトリスはこの大きな世界をより理解し始め、直感で真実にたどり着いた。それは少しずつわかってきたのだが、彼女の父は身分の低い女性と結婚し、母はこのアールズコートの威厳に満ちた館には憩いの場を見いだせなかったのだ。

初めは、彼女は強い義憤に駆られた。次いで冷静な思考が、自分には正しい判断はできないと彼女を押しとどめた。アール卿が彼女のもとを離れたのか、母が父と住むことを拒んだのか、彼女にはわからなかった。

アール卿の令嬢の人生をこの雲が初めて曇らせた。だが若さと美しさをあんなに早くに失ってしまった、もの静かで悲し気なあの母に対する彼女の愛情は変わらなかった。ありうるとすれば、今まで以上に母を愛していた。その愛情には憐みの混じった優しさがあつた。

「お可哀想なお母様！」とこの若い娘は思った——「気の毒な優しいお母様！もつとお母様に優しくして差し上げなければ、そして今まで以上にお母様を愛さなければ。」

「美しい娘のベアトリスが、なぜこれほどしょっちゅう手紙を書き、自分への愛を示してくるのか——毎週毎週、高価な贈り物がエルムスに届けられるのか、ドラにはわからなかった。」

「あの子はお小遣いをすべて私に費やしてきているのに違いないわ。」と彼女は独り言を言った。「どんなにかあの子は私を慕い、愛してくれていることか——私の美しいベアトリス！」

レディー・ヘレナは、この母親の深い愛情をよく覚えていた。夫と子供たちをとりあげられてしまった、孤独で愛されることのないこの妻を、彼女は憐れんだ。ドラを慰めるため、彼女は力の及ぶ限りのことをした。彼女はドラに長い手紙を書いた。そしてその中で、彼女の娘たちがどれほどの称賛を浴びているか、その栄光をどんなにドラに見てもらいたいと自分が願っているかを綴った。そしてベアトリスがどれほど多くの男性を魅了し、あの誇り高く、気位の高いエアリー卿がどれほど彼女の側から離れないことか、そして自分の考えではベアトリスも誰よりも彼に好意を寄せているらしいなどと記した。

「アール卿も私自身も、ベアトリスにとってこれ以上に輝かしい未来を思い描くことはできないでしょう。」とレディー・ヘレナは書いた。「リントンのエアリー卿夫人ならば、あの子の出自と美しさにふさわしい地位ですから。」

しかしドラの返信を読んだ時にはレディー・ヘレナでさえ、仰天

した。それは、彼女の娘に救いがあるように——愛と結婚という恐ろしい危険を回避し——彼女にこのまま、清らかな若い日々を樂しませてやってほしいという、懇願だった。

「幸せな愛などありません。」と憐れなドラは書き綴った。「そしてありえるはずもありません。男性は、忍耐強く、親切で誠実にはなりえないからです。彼らは自分のことを賛美し、自分たちの愛する女性については内省するのです。ああ、レディー・ヘレナ、あの子をお助け下さい。いわゆる愛があの子に近づかないように！愛が私をつつましい家庭から連れ出して、私の人生をねじ曲げてしまったのです。私の、明るく美しいベアトリスに、私と同じ苦しみを味わせないでください。私が絶えてきた残酷な愛のあざけりと悲しみをあの子たちが経験するのを見るくらいなら、愛しいあの子たちを両腕に抱きしめて横たわり死んでいきたいのです。レディー・ヘレナ、お笑いにならないでください。あなたのお手紙は私を悲しませます。昨夜お手紙を読んだ後、私は娘の頭にウェディングベールを被らせ、それがあの子をとりまくと突然それが経帷子に変わってしまったという夢を見ました。母親の愛情というのは本物で、この愛情が、ベアトリスに危険が迫っていると告げるのです。」

(以下、次号)

注1) 原文は、底本としているリプリント版では fact となっているが、文脈上不自然であるため、Street & Smith 社版 New Bertha Clay Library No.70 の Dora Thorne (1900) を参照し、該当箇所をこれに従い face として翻訳した。